

生きる場としてのコミュニティ ——ハーバート・ガンズ『都市の村人たち』を読む——

林 恭平

目次

1. はじめに
2. 仲間集団社会
3. ケア提供者の諸類型
4. 階級をどう規定するか——階級下位文化
5. スラムと低家賃地区
6. 『ストリート・コーナー・ソサエティ』との関連
7. おわりに

1. はじめに

20 世紀から 21 世紀にかけて、日本のみならず世界中で格差社会、貧困問題がクローズアップされ、日本ではその流れのなかに孤独死の問題、コミュニティの崩壊という問題が位置づけられている。現代は個人に分節され、ごく一部の「ウチ」で固まって「ソト」との関係が切断されているために、「社会的孤立」が発生する、という論が展開され¹、人口減少社会において、コミュニティをどのように「デザイン」するか、という問いが発せられる²。

東京圏では、オリンピックに向けて一斉に再開発が始まっているが、その手法は古い建物を壊し、新たにタワーマンションを林立させるようなものである。新規の、経済的にある程度豊かな住民をどのように獲得するかに心を砕いているようにさえ見受けられる。

また、高齢者やホームレス、貧しいひと等ケアを必要とするひとにフォーカスが当てられることが多くなっているが、そういったこととどのように向きあえばよいか。

本論文はこうした問題に取り組むための補助線として、ハーバート・ガンズ『都市の村人たち』(*The Urban Villagers: Group and Class in the Life of Italian-Americans* (New York, 1962=1982)、松本康訳『都市の村人たち』(ハーベスト社、2006

年)(本書のみ引用の直後に頁数のみを示す))を読むことを目的とする。

ガンズは 1927 年ドイツ生まれで、1940 年に米国に渡った。シカゴ大学大学院を修了したあと、都市計画関係の仕事に就く。その後ペンシルヴァニアで博士号をとり、社会学の講師、都市研究の教授を務め、1971 年からコロンビア大学で社会学科教授となった³。

本論文で取り扱う『都市の村人たち』は 1957 年 10 月から 1958 年 3 月までの半年間、ボストンのウェストエンドでの参与観察をもとに書かれたものである。ウェストエンドはイタリア系移民が多数を占める街で、ガンズがフィールドワークに入った頃には再開発対象地区となった「スラム」であった。ガンズの参与観察の目的はこの「スラム」というものがどのようなものであるのか、中産階級のケア提供者や計画家が逸脱だとするスラムの生活様式がどのようなものか、そしてケア提供者らの問題解決のアプローチの正当性を検証するためであった(xi 頁)。

ガンズが参与観察を行なったウェストエンドのとなりには、20 年ほど前にウィリアム・フート・ホワイトが『ストリート・コーナー・ソサエティ』⁴という本を執筆する際に参与観察を行なったノースエンドがあり、ここもイタリア人地区である。後述するが、本書はこのホワイトの著作からおおいに影響を受けている。

ガンズはウェストエンド住民⁵の生活様式の特徴として「仲間集団社会」(the peer group society)を指摘する。これは親族を中心とした社交単位である。そしてこれをエスニックに特有のものではなく、階級によるものだとして「階級下位文化」(class subculture)を提起する。

³ この経歴は『都市の村人たち』の松本康のあとがきに依拠している。

⁴ William F. Whyte, *Street Corner Society*, (Chicago, 1943) [ホワイト著、奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』(有斐閣、2000 年)。

⁵ 本書ではイタリア系第二世代を指している。

¹ 広井良典『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』(筑摩書房、2009 年)、249-250 頁。
² 山崎亮『コミュニティデザインの時代——自分たちで「まち」をつくる』(中央公論新社、2012 年)。

本書は「ときとして民族的な飛び地をロマンチックに描写したものであり、時代おくれのゲマインシャフトを防衛するもの」(viii 頁)と読まれてきた側面があった。それと同時に政府のスラム・クリアランスに対する反対の起爆剤となった、という評価も有る。そしてその後アメリカで貧困の問題が大きく取り上げられるようになり、「貧困戦争」が展開されるときに、ガンズは影響力を持って発言を行い、後述するオスカー・ルイスの「貧困の文化」やウィルソンの「アンダークラス」といった、同じリベラル派の貧困研究者の論が、逆に保守系の、貧困者は救済価値があるかといった言説に回収されていくことに警鐘を鳴らす。本論文で「貧困の文化」に対するガンズの批判は後に検討する。

本論文の流れとして、まずはガンズがウェストエンドにおける集団をどのように描き出したかを見る。それはすなわち仲間集団である。次にウェストエンドに存在するケア提供施設との関わり方を見る。ケア提供者は、ウェストエンド住民に対し様々なケアを行い、彼らなりのやり方で生活条件を向上させようと試みるのだが、なぜそれがなかなかうまくいかないのかを論じている。次に、ガンズはウェストエンド住民の生活を「階級現象」として論じるのだが、ガンズのいう階級とは一体どのようなものなのかを見ていく。そしてスラムと低家賃地区の違いとはなにか、を見る。それによって、正当なスラム・クリアランスとは一体何かが論じられる。最後に、ガンズがおおいに参考にしたであろう先行研究の『ストリート・コーナー・ソサエティ』とのかかわりを見ることとする。

本論文を貫いている論点は、置かれた状況を異にする様々な集団同士がどのように出会うかを「階級」という補助線を引いて見るということである。

2. 仲間集団社会

この節でまず触れるのは、ウェストエンドにおける集団類型である。これは本書において最も基礎的な概念のひとつであり、ガンズの議論において不可欠なものである。

ガンズは『都市の村人たち』において、ウェストエンド住民の生活には3つの集団が存在してい

るとしている。それは第一次集団(primary group)、第二次集団(secondary group)、そして外集団(out group)である。第一次集団というものはガンズが仲間集団社会と呼ぶもので、家族、親族を中心とした集団である。これがウェストエンド住民の生活の中心となる。第二次集団とは、イタリア人の機関や自発的結社、そしてその他の社会団体といった、仲間集団社会の働きを支援するものである。ガンズはこれをコミュニティと呼ぶ。外集団は、ウェストエンドにあるさまざまな非イタリア人の機関であり、ウェストエンド住民の生活に何らかの影響を与える、あるいは与えようとするものである。これには病院だとか、セツルメント・ハウスのようなケア提供機関が含まれる。以下ではそれぞれについて少し詳しく記述する。

仲間集団とは、ウェストエンド住民の生活の中核を成す第一次集団である。親族を始めとした家族圏が中核を成している。ウェストエンドの家族類型は、経済単位ではない拡大家族(extended family)の類型に近い。つまり、世帯で見れば核家族で暮らしているパターンが多いが、夫婦で補えない機能を親族が補う。たとえば、夫が助言を求めるのは基本的に妻ではなく兄弟である。「婚姻上のパートナーは、……悩みをお互いのあいだで解決するというよりも、兄弟姉妹や他の親類や友人のあいだで解決する。男性は兄弟に相談し、女性は姉妹や母親に相談する」(41 頁)。これは子どもの頃から培われた仲間集団の作法である性別分離に基づき、それゆえに拡大家族との関係が重要になるのである。

仲間集団では、隣人も潜在的に集団の成員となる可能性を持ってはいるが、ただ隣り合うだけではその資格はない。そこにある要請は「出身背景、関心、態度などの点で比較的適合的でなければならない」(61 頁)というものである。つまりは、同じ民族的背景、同じ階級、同世代、同性で構成される。そしてこうした仲間集団がいくつもあり、一大ネットワークを形成している。つまり、住民の自己認識として、まず自分がどの仲間集団に属しているかが重要であり、「ウェストエンド」という一つの地域に暮らしているという意識はほぼなかったようであった。

この仲間集団においては、厳格な統制と厳しい

競争があった。集団の中で好まれ注目されたいという欲求が競争を生むが、その一方で、その集団がなければ競争の意味がなくなるがゆえに、集団からの「逸脱」、その解体を望むような動きはできなかった。ゆえに、中産階級への移動やキャリアの追求という欲求も、仲間集団においては正当なものとはならなかった。

子ども期において、この仲間集団の規則、つまりはストリートでの自らが属する集団規則と、親が求める行動様式との矛盾が起こる。

「子ども期と青春期は、長くつづく友人関係が形成される時期でもある」(58頁)。この時期に仲間集団は形作られ、大人になっていっても、その付き合いはつづく。家族圏の外の友人関係のほとんどはこうした友人である。そしてこれは空間的要因も含まれている。つまり、ウェストエンド住民があまり住まいを移動しないという事実にもとづいている。

また、第一次集団が生活の中心であったので、「外部世界」(outside world)という、仲間集団社会や自発的結社等のコミュニティ機関を超えた存在とは距離を置く。それは雇用主、専門職、中産階級、都市政府、そして国民社会からなる世界である。労働や医療、教育の場面でこれらの機関は関わることになる。これらの有用性に関しては、ウェストエンド住民は懐疑的である。基本的に外部世界は仲間集団の様式の変更を迫るものであり、住民は「かれら」から搾取されると予期しているからである⁶。

ウェストエンド住民は仲間集団を中心として生活していたが、搾取されると予期している外部世界とのかかわりの中で、地域全体で団結するような「参加」の仕方は行われなかった。スラム・クリアランスが目前に迫ってさえ、行動を起こすものはほとんどいなかった。「コミュニティ活動」は結局仲間集団の前ではその重要性は薄かった。「ウェストエンドの女性の多くは、事実上の仲間集団であるインフォーマルで名前のないクラブに所属していた」し、「青年期とヤングアダルト期の仲間集団は、さまざまな理由からクラブとして組織されていた」(88頁)。マーク・グラノベッターは、

これを「強い絆」と「弱い絆」で説明する。強い絆で結ばれるよりも弱い絆で結ばれる方が、「うわさ」の拡散範囲がより広いという論理を打ち立てたグラノベッターは、それをウェストエンドに当てはめようと試みた。ウェストエンド住民は仲間集団という「強い絆」に編み込まれ、「友達の友達」という形で関係が結ばれ、グラノベッターのモデルでは、AがB、Cと強い絆で結ばれているなら、BとCもまた同様の関係になっていくので、結果としてまた強い絆で結ばれる。仲間集団はそうした形で形成されるため、コミュニティ形成の架け橋とならない、という主張であった⁷。ガンズはこれに対して、再開発への反対運動をウェストエンド住民が組織できなかったのは、情報の不足や政治的力の欠如、メディアによる「スラム」のレッテル張りで無力になっていたことなどを挙げ反論しているが、グラノベッターの仮説は、インフォーマルな自発的結社の活動にかかわるのを躊躇してきた説明になるかもしれないとは認めている(223頁)。

3. ケア提供者の諸類系

ここではガンズの「ケア」の概念を見ていく。ひとが集団で生きていくなかでケアは欠かせないものであり、同時に、住民が外部世界的な価値観に触れることとなる場面であるからである。

日本語で「ケア」という用語は主に福祉のことばとして使われる。その対象は高齢者や障害者、子どもに対するものが多い。ただこれはただ単に「患者に治療的なケアを与える人びと」を指すかといえ、必ずしもそうではない。職業的なケアとして、例えばデイケアや介護が挙げられるが、同時に家族によって担われるものでもある。家族が身内を「ケア」するとき、これは「当然視」され、「両者の境界はほとんど意識されていない。それゆえにまた、家族内部で行われる支援は、彼らの主体性を支える支援というより、彼らの生存、生活全体に気を配る相対的なものとなり、情緒的な深いかわりのなかでケアとして行われる⁸」

⁷ Mark Granovetter, "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, vol. 78, (April 1973), pp.1360-1380.

⁸ 西野理子「家族による支援、家族への支援、そしてそのつながりの変化」『地域におけるつながり・見守りのかたち 福祉社会の形成に向けて』(中央法規出版、2011年)。

⁶ この予期が正当なものであるかどうかはここでは重要ではない。

とされてきた。つまり、ケアは職業的なものと別に、そのひとと分かちがたい存在である者としての責務のようなものとも捉えられる。

そうした、家族をインフォーマルな「聖域」とすることは多くの批判にさらされ、ケアということが地域や「コミュニティ」とのかかわり合いの中で考えられるようになってきている。ケアというものを一方的な支援として捉えられるだけでなく、「相互性」と「他者とのつながり」として捉えようというものがある。それは「ケアをする」ものが、同時にケアの対象である高齢者や子どもから言葉や行為をもらうことができる、という話となる⁹。つまり、ケアというものを広く捉え、「ケアするもの—されるもの」という関係から抜けだして、より広く捉えていこうということである。

これに対し、ガンズのケア概念はどのようなものであろうか。これを提供するひとびとは、「患者にケアをあたえるだけでなく、クライアントにとって有益であると〔主観的に〕考えられる他の種類の援助もあたえる機関や個人であって、もっと重要な目的のための手段というよりも援助自体を目的として提供するもの」あり、そこには「医学的・精神医学的処置、ケースワーク」はもちろんのこと、「職業的・社会的・心理的カウンセリング、経済的支援、技術援助や情報提供、助言一般、そして教育的・準教育的プログラムなどを、利用者のために意図して提供する人びとと機関をふく」んでいる。それは「緊急時に援助にのりだす親類や隣人はふくめている」（117 頁）。そこに含まれないものは、製品を売るために助言するセールスマンのような人間である。しかし、これでは含まれるものの性格がはっきりしないので、それを明らかにする必要がある。

ガンズはケア提供を、利他的な行為ではなく、あくまで互酬的な関係であるとした。つまり、あるケアには物質的・非物質的に関わらず何らかの見返りがあるということである。そうした交換に際して、ガンズは更に 3 つの形態を述べる。1 つはサービス志向（service-oriented）のケア提供である。クライアントが自分ひとりでは達成できな

い目標を達成させるための支援（help）である。

次は市場志向（market-oriented）のケアである。これはクライアントが「求めている」ものを彼に与える（give）ものである。つまり、直接目標の達成に貢献しないかもしれないけれども、クライアントが好むものを与えることも含まれるということである。

最後は伝道者的（missionary）ケアである。これは、クライアントに、ケア提供者側（ウェストエンドの文脈においては中産階級）の行動と価値観を採用するように望む（want）ものである。ここに至っては、クライアントがそれを望むかどうかではなく、ケア提供者側の論理が優先されることになる。

ケア提供者は、特に伝道者的ケアにおいては、クライアントを従属的關係におくこと（を要求すること）がある。しかし、クライアントの側も必ずしもそうした関係を一方的に受容するわけではない。自らの目標達成や好みに合わないものを拒否することも出来る。見かけ上は関与していても、内心ではまったく従属しないということもありうる。

ガンズはこうしたケア提供者を更に 2 つに分ける。フォーマルなケア提供者とインフォーマルなケア提供者である。この区別はいわゆる専門職と非専門職である。インフォーマルなケア提供者は主にある文化の内部（ウェストエンドならウェストエンド住民）の出身である。

『都市の村人たち』において問題となるのは伝道者的ケア提供者と住民との関係である。伝道者的ケアは上述の通り want のケア提供であるのだが、それはしばしば住民に望まない生活様式を採用するように求める。しかし、ここでウェストエンド住民の労働者階級の生活様式と、外部のケア提供者がもつ中産階級の生活様式とのズレが問題となる。ケア提供者は「ウェストエンド住民を、目的をもった集団、とくに近隣地区と都市に参加することのできる客体志向の諸個人に変化させたいと望んでいた」（122 頁）。ここでいう「参加」（participate）が意味することは何か。それは近隣にある、セツルメント・ハウスや学校の協議会のようなフォーマル組織への参加であった。しかし、これは仲間集団を中心とするウェストエンド住民

⁹ 黒澤祐介「ケア・コミュニティ・世代間交流」『コミュニティ 公共性・コモンズ・コミュニタリアニズム』（勁草書房、2010 年）。

の生活様式にはなじまないものであった。

伝道者的ケア提供者といえども、「援助」や「与えること」に関心があった。しかし、生活様式の変更と合わせて、こうした目的を達成するためにはウェストエンド住民の生活がなぜ自分たちと違うのか、どのように違うのか、そして生活それ自体がどのように構成されているかを理解しなければならなかったのだが、専門職のケア提供者にはこれが欠けていた。だからこそ、なぜ住民がケアを受け入れないのかを理解できなかったし、再開発計画においても、ピントのずれた助言しか出来なかったのである。それどころか、「文化的障壁のために、理解の欠如、あきらめ、そしてクライアントについてときとして感じる恐れなどがないまぜになって、ウェストエンドのほとんどのケア提供者にまわりついていただようだ」(131 頁)。ただソーシャルワークの技術的訓練を受けただけのケア提供者に、この文化的障壁を乗り越えることは出来なかった。そこでとられた対応は、ときには統制を取ろうとし、あるいはかなりの努力を、まだ判断の付かない子どもに集中させ、地域における自らの有用性をアピールする方向へ進んだ。後述するノースエンドのケア提供者と、若干違うが、基本的な構図（厄介な青少年の対処に困難を伴う）というのは同じであろう。ただ、専門的なケアはそれでも必要とされていたということは指摘しておくべきである。

ケア類型では、内部のケア提供者も挙げられたが、これは仲間集団内部で行われたケアのことである。おもに助言やインフォーマルな「訪問看護婦」(visiting nurse)のようなひととも存在していたようである。あとは教会も内部のケア提供者に数えられていたようであった。しかし、このような内部のケア提供者は、必ずしも専門的な知識を持ってなく、本当に専門的なケアが求められる場面では誤った方に導く恐れもある。

日本語の「ケア」とはまた違った含意のあるガンズのケア概念である。日本の福祉では「みまもり」や地域という視角が取り入れられることによって、より包括的に捉えられる。しかし、ガンズのいう「文化的障壁」(the cultural barrier)は必ず横たわる問題である。

4. 階級をどう規定するか——階級下位文化

ではここで、ケア提供者がウェストエンドで活動するにあたって直面する「文化的障壁」とは一体何か、つまり「階級」(class)とは何か、ということが問われねばならない。階級というものはいかにして定義づけられるのだろうか。ガンズはウェストエンドの生活様式をエスニックなものとしてだけでなく、階級的なものとして記述することを強調している。ここではガンズが階級をどのように用いるかを見ていく。そして、それがアメリカの「貧困研究」とどのような関わりを持っているかを明らかにすることもこの節の目的である。

「階級とは、全国的な経済と社会の構造から生じる下位文化を伴う階層である」(18 頁)。ガンズはまずこう定義づける。では、ここでいう経済と社会の構造とは何であろうか。そして下位文化とは何であろうか。

まずガンズが用いたのは所得、職業、学歴である。研究者がこれらを用いる時と、ウェストエンド住民が用いる時は区別している。

ガンズはコミュニティ研究センターのデータを使って、これら 3 つを分析した。センターの調査が示すには、ウェストエンド住民の職業は、専門職や管理職に就いているひとはわずか 1%で、熟練事務労働者と小事業主も 6%であり、一方半数以上は未熟練・半熟練労働者である。所得は週給で 25 ドル～175 ドルまでの幅がある。学歴は、高校卒業者は少数派で、大学に通っていたのはわずか 2%である。こうした数字での基準を用いるのが研究者の視点であり、こうした基準に照らし合わせれば、ウェストエンド住民の大多数は労働者階級に位置づけられる。ここで下層階級は「さまざまな理由から未熟練でしばしば臨時の仕事について」(19 頁)いるひととされている。つまり労働者階級はある程度安定した、未熟練ではない仕事についているひとということになる。そして、上位の数%入るものが下層中産階級ということになっている。ウェストエンドは、統計を使えばこうした階層構造となっている。

次に、ウェストエンド住民がどのようにこの階層を位置づけるかを見る。内部での位置づけと外部からの位置づけの近似性と相違は、仲間集団社会と外部世界の関係を理解する上で重要である。

まず所得区分であるが、これはより生活に関連付けられた表し方になる。すなわち、週ごとで生活しているひとたち、そこから少し抜けだして貯蓄を少しばかりしているひとたち、そして稼ぎが不安定なひとたちである。ここではウェストエンド住民の基準に照らせば上位の一握りにはいるひとと最底辺の極貧者は、その数があまりにも少ないために除外されている。

ウェストエンド住民の職業区分はどうか。まずは雇われと自営業の区分があるが、自営業者はほとんどいないので、必然的に雇われの区分がさらに行われる。一般的にはカラー（襟）の色で分けるが、ここでは「きれいな仕事と汚れた仕事」（20頁）を分ける。どのようにこの2つを定義するかといえば、「汚れた仕事」を「肉体的に消耗する未熟練で汚れる仕事」とし、「地位が低い」ものとされている。

学歴は、住民内での区分としては機能しない。外部世界の高学歴のひとと自分たちを区別するためだけに使われる。また、「きれいな仕事につく機会を得る源泉として」（20頁）認識されてもいる。第一世代、第二世代、第三世代と高等教育への関心が高まっていく傾向にある。

こうした区分はしかし、生まれながらにして得られる機会に依存するので、ひとびとの力が及ばない。よって、ウェストエンド住民はこれで階級を規定するのは公正ではないと考えており、もっと有用な区分として行動パターンを採用する。要するに、仲間集団の規定に従って行動を統制できるかどうかである。その類型として、①不適応者、②中産階級への移動者、③ルーティンを追求する人びと、④アクションを追求する人びとがある。『都市の村人たち』において、③と④が特に重点的に描き出されている。すなわち、ルーティンを追求するものは日々の生活を慣習化し、仲間集団の集会もルーティン化して安定を求める。ガンズはこれをウェストエンドの労働者階級を結びつける。すなわち、ルーティンを追求するという目標は、安定した仕事が生産される場合にのみ達成できるからであり、逆に言えば、その機会にアクセス出来ない場合にはまた違う反応の仕方をしなければならないということである。

アクションを追求する人びとは主に男性で青年

期の人間である。つまり、ルーティン的な生活を退屈と感じ、街頭での集まりを重視する。これは仲間集団の「暇つぶし」と呼ばれているが、セツルメント・ハウスでの破壊的な行動や街頭の規則にどっぷりと浸かることを指す。彼らはあくまでも仲間集団での規則内で統制をとっているため、ルーティンを追求する人びとはまた異なるが、同時に「不適応者」とも異なる。

ここで問題が提起される。つまり、階級を定義するのは職業・所得・学歴によってなのか、行動パターンによってなのか、という問いである。

ガンズの階級下位文化論と、『都市の村人たち』とほぼ同時期に発表されたオスカー・ルイスの「貧困の文化」論は、ガンズの論と似たように、「貧困」である下層階級の定義をその行動様式、社会規範に求める。そういう面ではガンズの論と親和性が有るように見えるが、ガンズは「貧困の文化」と階級下位文化は捉え方が異なると主張する。すなわち、ガンズは「状況主義」であり、ルイスは「文化主義」である。両者の違いはなにか。

状況主義者の考え方は、下層階級の「文化はなによりもまず経済的その他の諸条件にたいする反応であると信じているので、行動のさして重要でない原因以上のものではないとみなしている」（227頁）。すなわち、文化が生活様式と分かちがたく結びついているのではなく、直面する状況が変われば、文化も変わり得るという立場である。一方文化主義者は、「文化を貧困層の生活条件とは独立した自己永続的な力であるとなしている」（227頁）。つまり、状況が変わっても、生活文化は保持され、それは階層移動の妨げになると見なされる。「文化的（そして心理的）障害に注意を払う人は、社会移動について文化主義的見方をする。すなわち、人間は優先される価値観と行動パターンの観点から変化に対応し、彼らの文化に合致するような変化だけを採用する、というものである。」¹⁰すなわち、文化というものの永続性を前提とするのである。そして、その文化を保持する形で変化に対応していくという見方となり、それは貧困層が貧困層であることを望んでいるかのようなミスリ

¹⁰ Herbert J. Gans, "Culture and Class in the Study of Poverty," in his *People, Plans, and Policies: Essays on Poverty, Racism, and Other National Urban Problems* (Columbia University Press, 1991), chap.20.

ードをしてしまう。ガンズは貧困層が貧困層の文化を保持するのはあくまで裕福な階級の生活を実現するための機会と資源を欠いており、「代替的な行動指針」(226 頁)に頼って貧困に対処するからであるにすぎないと主張する。その行動指針にしたがうことによって内部のひとが肯定的に語ったとしても、外部のひとはすぐに、彼らが満足していて、その文化を手放すことはないと考えてはいけないのである。

上記の文化主義的見方、すなわち「人がある社会的文脈のなかでいくらかの尊厳と情緒的安定を保ちつつ行動を起こすための道徳指針¹¹」である行動規範と願望を一致したものとして理解する考え方が妥当するのは、「周囲から相対的に隔絶した、集団としての維持・存続というほぼ単一の秩序原理ないし道徳的規範が隅々まで浸透しているような、今日においては極めて特殊な状態にある社会集団のみである。そこでは人々は、集団の維持・存続に機能的であるように常に自らの行動に従わせなければならないので、行動規範と価値の葛藤ということは最初から問題となりえない。」¹²ともすれば人格志向の仲間集団社会は、自らの集団を保持するように動いているようにみえるかもしれないが、それさえも単一の原理で結びついているわけでもなく、そして絶えず外部世界との接触に晒され、集団の論理との対立が見られる。

もう一度確認しておけば、ガンズは階級下位文化を「人びとが出会う機会と剥奪にたいする反応」(209 頁)ととらえる。「もっと特定していえば、各下位文化は、自然環境と社会——それは共存しつつ競合する下位文化の複合体である——が人びとに提供する機会、誘因、報酬と、剥奪、禁止、圧力に対処するかれらの努力から発達してきた相互に関連する組織された一群の反応である」(209 頁)。機会としてガンズが重視するのが仕事である。労働者階級と下層階級の下位文化も、仕事の機会をどれだけ得られるかによる反応である。つまり、「安定的な雇用が利用できるかどうか」(210 頁)に左右される。

「階級間のもっとも重要な——あるいは少なく

とも最も目につく——違いは、家族構造の違いである」(205 頁)とガンズは述べるのだが、これもまた仕事の機会が関係している。ウェストエンドのような家族圏を中心とする社会は、安定した仕事の供給が不可欠であるが、それがなくなれば、ルーティンを維持できず、家族圏も解体へと向かい、下層階級となる。雇用の不安定さによって、生活の予測が不可能となってしまう、あらゆることが安定からこぼれ落ちる。ガンズが階級としてルーティンを追求する人びととアクションを追求する人びとを分けたが、これが対応するのである。

ひとつの世帯だけでなく、家族圏で支えようとする労働者階級であるが、しかし、日本の都市に目を転じてみれば、安定した雇用を得ているが家族圏を構築していないひとが多くいることに気づく。ウェストエンドの場合、居住の流動性が良くも悪くもほぼなかったことにより、イタリア系の住民が同じ場所で仲間集団を築くことが出来た。ガンズは先行研究から、他の地域の労働者階級でも見られることであると述べるが、現代の都市での再検討が必要であろう。

いずれにせよ、ガンズの階級論は、経済的關係からだけでなく、かといって行動様式と深く結びつけすぎもしないものである。「貧困の文化」はその根強く残るという文化の捉え方ゆえ、下層階級へのレッテル貼りを招いてしまったという事実があった。ガンズが近似的なものであると認めながらルイスを批判しなければならなかったのはこうした事情もあった。

5. スラムと低家賃地区

これまではケア提供の場面における「文化的障壁」と、階級概念について、ガンズがどのように考えていたか、その特質を追ってきた。この節では、このような階級間の差異によって、ウェストエンド住民の生活が決定的に破壊されてしまった場面であるスラム・クリアランスを、ガンズがどのように捉えていたのかを確認し、そしてそれをどのように考えるかを述べる。

ウェストエンドは連邦政府より「スラム」の認定を受けて、再開発計画の対象となった。しかし、その決定が公正なものであったか、ガンズは疑問を投げかけた。つまり、「スラム」とは一体何か、

¹¹ 西村貴直『貧困をどのように捉えるか——H・ガンズの貧困論』(春風社、2013 年)、194 頁。

¹² 同上、213 頁。

そして低家賃地区との違いは何かということである。

「スラム」という評価をある地域に当てはめる時、そこに含まれる基準は「その地域の社会的イメージと、その物理的状態である」(278 頁)。基本的に政府の基準は後者に基づいている、すなわち、建物の老朽化の度合いや密集の度合いといった物理的環境に基づく。だが実際には、それと同じくらい社会的基準、つまりその地域の社会的イメージ（その地域住民の行動様式の反社会的なことや「病理的」なこと）が重要なファクターとなってくる。そしてそのイメージが、再開発計画を策定する側の「階級的バイアス」に基づいて、ガンズが描いた下位文化の違いにすぎないものも「病理的」としてえがきだされてしまう。そして再開発計画は、住民がよりよい住宅に住めるように、そのニーズを汲み取るものではなく、単純にその貧困な近隣地区を壊すために行われる傾向が強い、とガンズは結論付ける。

ガンズは住宅の老朽化や低家賃構造物それ自体が有害でスラムの基準になるわけではないとし、そこで見出される社会的基準も、その近隣地区と一体であると評価することの困難さを挙げる。状況主義的観点から言えば、「病理的」と判断されるような行動様式でさえ、経済的、社会的状態がその原因であり、ただその状況に反応しているにすぎないと見ることになる。

また、地域住民の平均所得が低いとか、教育水準が低いというものも、ただ貧困なひとが多く暮らす低家賃地区で、高齢者やケアを必要としているひとが多く住んでいるということを示すにすぎないと指摘する。生活における不便というものは強弱があれ、どの地域にも見られるものである。年をとれば誰しも援助は必要である。「不便」と「有害」はしっかり区別しなければならない。

ここで気をつけなければならないのは、ガンズは決してスラム・クリアランスに全て反対しているわけでもなく、ウェストエンドに実際有害な建物は存在していたと述べていることである。ただ実際には低家賃地区とみなすのが正当であり、「全体のクリアランスは、最終的な結果としてウェストエンド住民によりよい生活条件をもたらす場合にのみ、正当化されるであろう」(285 頁)とする。

その住民のために行われるならばある程度の正当性は担保されるかもしれないが、実際には住民は立ち退かせ、もっと利用価値のあるものにしようとするものばかりが、都市再開発として行われた。

6. 『ストリート・コーナー・ソサエティ』との関連

この節では、『都市の村人たち』の先行研究である『ストリート・コーナー・ソサエティ』と『都市の村人たち』がどのように関連しているか、それがどのような意味を持っているかを述べる。

ガンズより 20 年ほど前、ウェストエンドに隣接するノースエンドという地域でフィールドワークを行なったのは、ウィリアム・フート・ホワイトである。ノースエンドはウェストエンドと同じく、イタリア系移民が多く住んでいた場所である。ホワイトはそこの「コーナーヴィル」という場所で、ノートン団やイタリア・コミュニティ・クラブといったギャング団の参与観察を行なった。ガンズがウェストエンドの参与観察を行う際、ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』は「おおいに励みになった」(314 頁)。ガンズの研究目的がホワイトのそれと似たものであったことや、その手法も参考になったようである。実際、『都市の村人たち』において、ホワイトの引用はかなり多く見られる。ホワイトの研究を念頭に置いているのは明らかである。

その中でとりわけ『都市の村人たち』に関連がある部分をいくつか挙げておく。

ケア提供者、とりわけセツルメント・ハウスのソーシャルワーカーとコーナーヴィルとの関係は、ウェストエンドにおけるケア提供者と住民との関係と類似している、とガンズは述べている。

ノースエンドのセツルメント・ハウスのソーシャルワーカーは非イタリア系、つまり外部世界からやってきた中産階級あるいは上流階級に属するものであった。彼らは、ホワイトが深く関わっていたノートン団やイタリア・コミュニティ・クラブをはじめとしたコーナーヴィルの社会組織について理解することはなかった。

ソーシャルワーカーたちは、自らの規範にコーナーヴィルのコミュニティを従わせることを目標

としていた。これはまさしくガングのケア提供者の類型の一つである「伝道者的ケア提供者」にあたる。ここでホワイトは、セツルメント・ハウスの方こそコミュニティにおいては異質な存在であり、その試みは失敗するということを指摘していた。実際、セツルメント・ハウスの利用者はかなり限られたひとたちであったという。むしろ、コーナーヴィルで男性人口の多数を占めるコーナーボーイズという青年層を排除する言動があったことが記録されている。地域住民を上の方級の生活文化に編入させるという目的がありながら、同時に排除も行なっていたのである。

そして、セツルメント・ハウスへの参加、すなわちその指導を受け入れるひとをストリートの規範から完全に切り離すことを目的としていたために、セツルメント・ハウスとその指導を受け入れた人びとを、大部分のコーナーヴィルの住民から孤立させることになったのである¹³。

コーナーヴィルの「街かどのギャング団の組織」は少年期からの「居住的結び合い」から生まれたものであった。少年時代の初期からはじまった仲間の組織は20代後半から30代前半まで存続される。仲間の家族が転出していったとしても、残ったグループ成員が他のグループに合流するか、出て行ったひとと元の街かどの仲間に会いに通うこともある。ギャング団の多くは規則的に会合を開くことでつながりを維持していた¹⁴。

これはガングがウェストエンドで仲間集団社会として描き出したものと重なっているところが多い。ホワイトの記述を基礎として、ウェストエンドの参与観察に臨んだということは、こうした重なりからよくわかる。

1つ重要な違いとしてマイケル・パレンティが挙げているのは、その研究の記述法である。すなわち、「ガング氏は単に見聞きしたことを描くことに満足せず、彼の集めた膨大なデータをよく秩序付けられた、そして有用なコミュニティ・スタディに統合して構造化した。」¹⁵つまり、『ストリ

ート・コーナー・ソサエティ』は実際にホワイトが見たことを考察しているのに対して、ガングは観察したこと、ある程度の一般化、他の研究との関連を重視している。これは、コミュニティ研究がガングの時代とホワイトの時代で蓄積が違ったということも関係しているだろう。

7. おわりに

最後に『都市の村人たち』をどう評価するかを述べて終わりたい。

ルイスの「貧困の文化」によって引き起こされた「救済価値」の有無の言説は今でも生きているように思う。日本では、生活保護受給者がパチンコに行く姿をとらえられ、生活保護バッシングは根強い。貧困から抜け出せずに適切なケアを受けられないでいるひとがいることが問題視されながら、ジェントリフィケーションによって「キレイなまち」をつくり、コミュニティというワードばかり独り歩きしている。

ガングが提起した階級下位文化、ケア提供者の困難というものは、現代においても切実性をもった視角に思える。しかし一方で、過度な一般化に陥ると、地域の独特な特性を見落とす可能性があり、ある意味ではぎりぎりの綱渡りを行なっているとも言える。それでも、この一般化には意味がある。それは、時代も場所も違う事例を取り扱ううえで避けては通れないことである。これからやらなければならないことは、ある程度一般化されたものを、こちらで再検討して落としこむ作業である。「格差社会」やジェントリフィケーションがこれからも存在していく限り、必要とされる仕事であろう。

(HAYASHI KYOHEI・東京外国語大学大学院修士課程)

¹³ W・F ホワイト著、奥田道大、有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』(有斐閣、2000年)、113-119頁。

¹⁴ 同上、264-265頁。

¹⁵ Commentary

<https://www.commentarymagazine.com/articles/the-urban-villagers-by-herbert-j-gans/> (2015/11/09 アクセス)